

花は綴る

荻原 純子 福島県福島市 三十四歳

生き残ったのはラベンダーだけだった。

震災で、庭の鉢植えのほとんどがだめになったが、地に直接根差したラベンダーは生き延びた。

「でもね、あまり香らないのよね」

このラベンダーは、と母は言った。

しづといラベンダーだった。

庭の土色のがらりと替わった除染作業も生き延びた。雑草もなにもかも無くなった庭で、香らないラベンダーだけが生きていた。

「香ればいいのよね」

空っぽの庭で、母は呟いた。

あなた、生き延びたんだから、もうちよつとしゃんとしなさいよ、と。

それはまるで、母が福島で生き延びた自身に言い聞かせている言葉のようでもあった。

けれどもある日のこと。

家中がラベンダーの香りで満ちていた。

思わず庭に出ると、幼い息子が紫色の花を摘み取り、ぎゅうぎゅう握りつぶしている。隣には母がいて、嬉しそうに孫を見ていた。

「ねえ、こんなに簡単に香ったのね」

ラベンダーの香りの中で、幼い息子はきやつきやと笑っている。

花に、母の手が触れた。

「あなた、香れたのね」

震災を生き延びたラベンダーだった。

いくつもの命を、庭の片隅で見送ってきた。震災、除染、復興。気の遠くなるような、季節の輪廻の中で。母の、隣で。

「香れたのね」

古い友人に語るように、母は笑った。

風が吹く。空高く昇っていく香りを心が追う。

それは生き延びた証しであり、思いの丈が綴られた、一通の手紙のようでもあった。